

外国語活動

主体的に他者と関わり、その中に楽しさや喜びを見出せる子ども

～「やりたい!」「できた!」の繰り返しを通して主体的実践力を育む外国語活動の授業づくり～

砂田 渚

1. 外国語活動における未来そうぞう

本校の外国語活動のめざす子ども像とは、「外国語を使って、主体的に他者とコミュニケーションを図り、その中に楽しさや喜びを見出せる子ども」である。

子どもたちは将来、多様な文化を持つ人々と共存していくこととなり、子どもたちにとって、外国語は必要不可欠なものとなっていくであろう。しかし、外国語はコミュニケーションスキルの一つでしかなく、それ以上に「主体的に他者と関わっていく態度」や「違いを理解し、受け入れる態度」などの育成が必要であると考える。そこで、本校の外国語活動では、外国語（英語）というツールを通して、友だちや身近な人と関わったり、新しい文化などに出合ったりする中で、自分との違いを知り、互いに理解し合えることに楽しさや喜びを感じられる態度の育成をめざしていく。そして、そうした態度が「もっといろいろな人と話したい!」「関わりたい!」という未知への好奇心や探究心などの情意を新たに生み、どんな状況や課題においても、主体的に他者と関わり、その中に楽しさや喜びを見出そうとする子どもたちの姿に繋がっていくものだと考える。

2. 「未来そうぞう」と教科との関係

(1) そうぞうの実践力を発揮する姿

外国語活動において、そうぞうの実践力を発揮している姿を以下のように捉える。これは6年生の卒業時にめざす姿であり、段階的にめざしていく姿である。

表1 『主体的に他者と関わり、その中に楽しさや喜びを見出せる子ども』

【そうぞうの実践力を発揮している姿】	
課題の解決に向けて、今まで学習した言葉や表現、他者との違いを受け入れる中で得た学びなどを活用して、新たによりよい表現方法を考え、相手とコミュニケーションを図り続けている姿	
【主体的実践力を発揮している姿】 <ul style="list-style-type: none">諦めずに課題を解決しようとしている姿主体的に他者と関わろうとしている姿	【協働的実践力を発揮している姿】 <ul style="list-style-type: none">相手の良い表現についてほめたり、必要な時にアドバイスをしたり教え合ったりしている姿身近な相手や他国の人々の考え方や文化について認め合っている姿

各単元で設定された課題に対して、持続的にアプローチをし、解決しようとしていく力が、未来そうぞうにおける「主体的実践力」であると考えられる。また、外国語活動では、コミュニケーション活動やグループ活動といった他者と関わる場面が非常に多く、互いに教えあう中で学びがつけられていく。加えて、身近な友だちから他国の人々の考え方や文化の共通点や相違点を見出し、それらを認め合おうとする力も外国語活動では必要であり、こうした力は「協働的実践力」と結びつく。そして、外国語活動では、相手に自分の思いや考えを伝えようとした時に、より良い言葉を選択するだけでなく、文字を見せてみたり、身振り手振りを使ってみたりといった、様々な表現方法を考え、工夫していく力も求められる。そうした工夫によって自分の思いや考えが伝わった達成感から、これまで学習してきた言葉や表現方法について意味や価値を見出し、活用していこうとする力が「そうぞうの実践力」であり、この力は、主体的実践力と協働的実践力を発揮させていく場を単元内に設定し、相互の力を高めあっていく中で、外国語活動においても発揮させていくことができると考える。

(2) そうぞう的实践力を発揮させるための手立て

本年度は、外国語活動において、主体的实践力の向上からそうぞう的实践力を発揮している姿をめざしていくこととする。そのための手立てとして次の①と②を考えた。(図1)

① 「必然性」を生む学習の題材や目標の設定

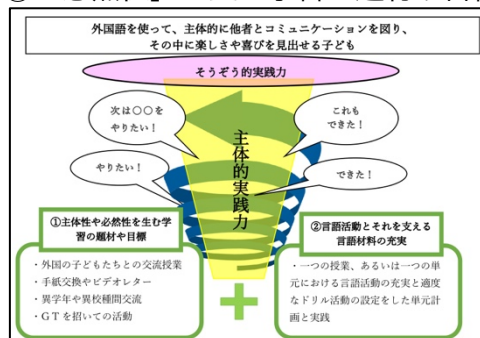


図1 外国語活動からアプローチする主体的実践力の育成のイメージ図

子どもたちが主体的に課題に向き合い、アプローチし続けるためには、「やってみたい!」「話してみたい!」という好奇心に加え、そこに英語を使ってコミュニケーションを行う「必然性」の生まれる題材の設定が必要である。例としては、本校で年間を通して行っている、外国の子どもたちや留学生といった、主として英語を話す人たちの交流(交流授業、手紙交換、テレビ電話など)や、異学年間の交流、幼稚園との異校種間交流などがある。こうした交流の場を単元のコミュニケーション活動のねらいに位置付けることで、子どもたちに

活動に取り組む「必然性」が生まれるとともに、明確な相手がいることで、諦めずに課題解決に向き合おうとする態度の育成ができるのではないかと考える。また、日本にある外国の言葉や文化の発見、自文化と他文化の共通点や相違点などに気づけるような題材や教材を扱うことも、異文化への興味・関心から子どもの主体的实践力を高めるきっかけとなり、さらには自文化の良さや素晴らしさに改めて気づく機会にもなると考える。

② 言語活動とそれを支える言語材料の充実

外国語活動において「言語活動」とは、インタビュー活動やスピーチなどの「互いの考えや思いを伝え合う」活動を意味し、言語材料について理解したり、練習を繰り返したりする「ドリル活動」とは区別して考える。(歌やチャンツ、発音練習など、自分の考えや思いを伝え合う要素がない活動は、言語活動ではなく、ドリル活動にあたる。表2) 英語を用いた「言語活動」では、子どもたちは自分のことを知ってもらったり、相手のことを知れたりすることの楽しさや喜びを感じることができ、それが、自分と他者、自文化と他文化等を認め合おうとする態度の育成にも繋がっていく。つまり、言語活動を充実させることで、子どもたちは英語を使ったコミュニケーション自体に意味や価値を見出すことができるのではないかと考える。しかしながら、言語活動を行うには、ドリル活動による表現の定着や言語材料の蓄積は必要不可欠である。「知っているから、だれかに伝えたい。」のであり、「これならできるかもしれない!」という自信が、子どもの主体的な態度に繋がっていく。そのため外国語活動では、一つの授業内、あるいは一つの単元内において、ドリル活動を適度に設定し、一定の言語材料の蓄積を図りながら、言語活動の充実を軸にした授業や単元計画を組み立てていく必要がある。

表2 『言語活動とドリル活動の違い』

言語活動例	ドリル活動例
→互いの考えや思いを伝え合う活動	→言語材料について理解したり、練習を繰り返したりする活動
<ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー活動 ・small talkや自分の思いや考えを伝えるスピーチなどの活動 など	<ul style="list-style-type: none"> ・歌やチャンツ ・key wordやkey sentenceなどの発音練習 ・定着のためのゲーム活動 など

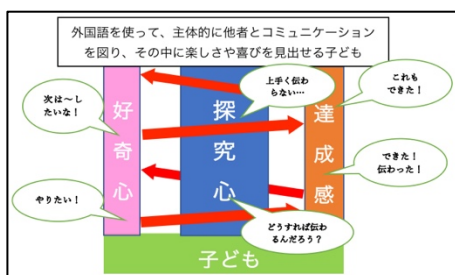


図2 外国語活動における学びのサイクルのイメージ図

次に、外国語活動の学びのサイクルを図2に示す。

「やってみたい!」「話してみたい!」といった「好奇心」から、「どうすれば伝わるんだろう?」という「探究心」は生まれる。その中で、子どもたちは、自分の思いを伝えるために様々な表現方法を考えたり、試したりしていく。さらに、上手くいかなかった時には、自分

の表現をふり返ったり、新たな工夫を考えたりしながら課題に向かって探求していく。そして、こうした繰り返しが成功体験へと繋がり、「できた！伝わった！」という「達成感」が生まれ、新たな「好奇心」へと繋がっていく。このような学びのサイクルは、外国語活動において単元ごとに回っていくものであり、そのサイクルを意識した単元構成を考え、設定していく必要がある。

外国語活動における学びのサイクルを、本年度の実践例とともに、以下に具体的に説明する。

第4学年「お店屋さんをひらこう！～ようこそ平野4-1商店街へ～」では、導入場面において様々な国のお店や商店街を紹介するとともに、日本との共通点や相違点を考えた。その中で子どもたちの中に「外国で買い物してみたい！」「外国の人とお店屋さんをしてみたい！」という思いが芽生え、「外国の人を招いてお店屋さんをしよう！」という、単元のゴールを設定した。子どもたちは、野菜や果物、文房具などの商品の名前、お金の言い方、買い物に関するフレーズなど（欲しいものや値段の尋ね方や答え方等）のお店屋さんを開くために必要な言語材料は何かを考え、自ら調べたり積極的にことばの練習に取り組んだりした。さらに単元の中に位置付けたインタビュー等の言語活動では、「友だちの英語を聞き取れた！」「でも、自分のことは上手く伝えられないな。」と自分のできた事や課題を見つけたり、「ジェスチャーを入れたら伝わりやすい！」「安いよ！って、何て言うのかな。」と、より良い表現の工夫を考えたりすることで、本番に向けてさらに学習意欲を高めていった。本番では、ゲストティチャー（ALTや留学生等）と英語を使って上手くコミュニケーションをとれた子もいれば、伝わらない時に、ジェスチャーを使ったり、文字やイラストを使って何とか伝えたりしようとする姿も見られ、どの子も達成感を得ることができた。さらに、ふり返りにおいて、「もっと積極的に話しかければ良かった。だから、またやりたい！」「次はもっといろんなことばを使って話したい！」と、子どもたちの中に新たな好奇心が生まれていった。

このように、①と②の手立てとともに、学びのサイクルを意識した単元構成や学習内容の検討が、外国語活動において、主体的実践力の向上から、そうぞう的実践力の発揮している姿へとアプローチしていけると考える。

3. 外国語活動における評価について

評価においては、主に「行動・発言の観察」「パフォーマンス課題」「ワークシートやふり返りシート等の記述」によって評価を行う。パフォーマンス課題については、インタビューやスピーチ、プレゼンテーション等の課題を観察するだけでなく、ICTを活用し、デジタルポートフォリオで記録したものからも見取っていくものとする。また、ことばに関する評価を除いては、ふり返りシートや活動の記録を共有するなどして、子ども自身による自己評価や子ども同士での相互評価も、単元や活動内容によっては取り入れていくこととする。

表3 『外国語活動における3つの資質・能力に関する子どもの姿と評価方法』

3つの実践力	外国語活動におけるめざす子ども像	評価方法
主体的実践力	<ul style="list-style-type: none"> 諦めずに課題を解決しようとしている姿 主体的に他者と関わろうとしている姿 	子どもの行動・発言の観察 ワークシートやふり返りシートの記述内容 パフォーマンス課題 他者評価
協働的実践力	<ul style="list-style-type: none"> 相手の良い表現についてほめたり、必要な時にアドバイスをしたり教え合ったりしている姿。 身近な相手や他国の人々の考え方や文化について認め合っている姿。 	子どもの行動・発言の観察 ワークシートやふり返りシートの記述内容 他者評価（上の項目のみ）
そうぞう的実践力	<ul style="list-style-type: none"> 課題の解決に向けて、今まで学習した言葉や表現、他者との違いを受け入れる中で得た学びなどを活用して、新たによりよい表現方法を考え、相手とコミュニケーションを図り続けている姿。 	子どもの行動・発言の観察 ワークシートやふり返りシートの記述内容

